

2022年度 新人賞奨励賞 選考総評

立花開

今年も多くの投稿をありがとうございました。自分の“思想”とどの詩形が馴染むかを探すこととは、表現の楽しさのひとつだと感じます。皆さまの挑戦に、私も表現者として大変刺激をいただきました。

郡司和斗

(新人賞) 特選

水糊のような夕に石段を登る／振り向きはしない／詩的すぎる街があるから
電話がまだ／うつくしかった季節に／よく靴を磨いた

会いたいと同じくらい／会えなくていいと思う／林檎しゅかつと齧る

掲出の一作品目は月次でも取り上げたので割愛する。

心の中にあるノスタルジイな記憶に浸るとき、思い出されるのは今までの記憶がない交ぜとなり美しい部分だけが抽出されたものである。「電話がうつくしかった季節」は四季には存在しないし、もううつくしくない季節を今の主体は生きているのかもしれない。「余いないと…」は破調の短歌とも自由詩ともとれる。林檎を齧る角度で呟き、口付けるように食べる。

石段を登るとき、靴を磨くとき、林檎を齧るとき、主体の目線も意識も俯く。郡司氏は、感覚を外に向かわせないために書き集めたもので自身の周りに城を創る。定型を破った際の裂け目から開花するような表現は大変面白く思う。自由詩・短歌共にこれからも読んでいただきたい作者である。

こはくいろ (優秀賞)

かかとから私が消えてゆく浜辺
私の肌の中／＼眠る貝殻よ

輪郭を求めています／あなたに触れられて／曲がつたままのまゆ毛

以前、言葉を大切にする作風だと言及したことがある。この世に接続するために用意された身体はふとしたとき心とすき間ができる。そこを埋めるために形作り、磨き、過不足なく塞ぐため隅々まで手を加えた丁寧な言葉たちがはめ込まれる。その作業は観念的になるくらいもあるが、作者には「曲がつたままのまゆ毛」と細部を見る力もあり、磨いた言葉の美しさを強みに、更に深く描けるものを見つけていただきたいくと思う。

奨励賞では、山本先生氏、杢いう子氏に注目した。

山本先生 (奨励賞)

綿虫の空が大きく暮れてゆく

「綿虫」は月次でも取り上げた作品である。「大きく暮れる」に、すべて生物にそれぞれの空があること、その中で綿虫の空を取り上げる纖細さを思う。「店先のダリアこれから住む故郷」「旅人はたとえば秋の風たとえば」など、作品の中に多彩な“立場”があり、作者は自在にそこへ入り込むことができる。

李いう子（奨励賞）

梅雨明けをぬぬと回転するケバブ

梅雨明けの空気に無遠慮に押し入り、主張するケバブ。「ぬぬ」というオノマトペは、食べ物としてぎりぎり許容できる不潔さに見える。だがこの不潔さは生命力の裏返しでもある。生き抜くことは、己の存在が良い輪郭となるまで押し入り続けることでもあるからだ。

李氏は新しく見つけた単語を作品の中に馴染ませる技術力が非常に高い。「花粉立ち昇るホルンのふくよかさ」「春雷を聴く銀色の糸通し」「退職のブーケの蕾だつた薔薇」。単語の中身を解体し、新しいものへ縫い合わせる。

吉沢 美香（奨励賞）

夕立の一粒ごとにある鏡

月次でも取り上げた作品。雨は数えられるものではないけれど、「一粒」と「雨の止めどなく降る様に主体が魅入っていることが伝わってくる。「雪降れよ星の重さが葉の重さ」など、小さな事象でもすべて等しく価値や重さがあることを見出している。

中矢 温（奨励賞）23

いいハムも棄てる亡父の冷蔵庫

おそらく一人で暮らして、一人で亡くなつた父。冷蔵庫の中の物を棄てていく。「いいハム」は貰い物か自分で購入したのか、どんな理由であれ何か特別な感情が働いて手にしたものであるはず。遺品整理は、物だけでなくその人の気配も整理していくことである。「父」の人生の背景も「いいハム」と共に棄てていく。

立花ばとん（奨励賞）

夜、／椅子を置く／夜になる私の心に

時間経過によつて訪れた夜かと思いきや、心の夜である。二度目の「夜」に、読み手の認識が塗り替えられる。座る人は誰だろうか。どんな椅子だろうか。景を描くことは大切なことのひとつだが、詳細を語らない余白はそれぞれの想いが入り込むことができる。読み手によって変わる作品。

今回、惜しくも賞をのがしたが、マズルカ氏の「アレルギーでも入れるか桃源郷」、小川いなせ氏の「幸せなひとを見る目が好きでした／劣等の挿絵のようでした」にも注目した。

読まれることで完成する面が詩歌にはあります。華やかな詩の跳躍は読む者の目を引き付けますが、その作品を書いた際に何が核となっているか、自分の書く言葉と心の間に入り込んでいるものがないか、推敲するときに己の心に問うています。純度の高いものが評価される世であってほしい、皆さまの作品を読んでいつも思います。